

創刊特別寄稿

心理学コースの頃

金城辰夫



現職：専修大学名誉教授

1967年 文学部人文学科入職，2001年 文学部心理学科退職

専門領域：学習心理学

人間科学部心理学科の発足，おめでとうございます。

先生方のたゆまぬご努力と，それに大学側が動かされて理解を深めたこともあってのご成果だと存じます。いずれにせよ，大変に素晴らしいことです。

ホームカミング・デイには体調不良のため出席できず，4号館の4階・3階の様子や心理教育相談室の模様など，目で見えてはませんが，藤岡先生（'86～）から図面や写真を送っていただき，大規模な展開ぶりに驚きました。また，波田野さん（'98～）に歴任教員スタッフの一覧表を送っていただき，その拡充ぶりは隔世の感であります。折角機会を与えられましたので，主にコース時代のことを想い起こしながら，以下綴ることと致します。

国文学科・英文学科・人文学科からなる文学部が設置されたのが昭和41年（'66）で，人文学科には，哲学・歴史学・地理学・社会学・心理学のコースがありましたが，初年度の心理学コースの教員は，重松毅先生（'64～'90，'06没）ただお一人でした。当時は，1年次生は一般教育・語学・保健体育を受講するだけでしたが，2年次からは専門科目の受講が始まるので，そこで，中谷先生（～'71，'94～'05），河内先生（～'74）それに私（～'01）の3人が入職して，それぞれの専門科目を担当することになりました。ただ，当時の学生数が1学年40～50人で，基礎実験は少人数のグループに分かれて行われるので，担当の中谷先生と河内先生は，専門科目のほかに，おそらく各3種（組）以上の実験指導ならびに毎週提出される学生さんたちのレポートの添削をされ，負担が過重ということで，翌年には実習助手としての野口（旧姓川井）さん（'68～'72）が増員されました。このあたりで心理学コースの陣容が一応整った形になったわけです。

重松先生は，専門科目以外に，教職の教育心理学，私は心理学概論ならびに他学部のも含めて一般教育・心理学，を担当していました。3年次からは，特殊実験（研究法Ⅰ）やゼミ（購読Ⅰ）が始まり，教員は平均10人前後の学生を受け持ちましたが，何故か私は人数が少し多めで，特殊実験（そして卒論）に関しては野口さんに手助けをお願いしたようにおもいます。当時の実験室は整ったものでは脳波室と感覚・知覚用の瞬間露出器のある暗室の2つだけで，錯視や刺激閾や記憶の実験，種々の検査などは周囲の教室が使用されていました。

これらのカリキュラムの立案そしてその実施や交渉・指示は，心理学コースの創業者としての重松先生がすべて行いました。先生の構想は，ご著書「性格形成の基礎構造」（'63，誠信書房）で知ることができます。内容は，因子論的類型論とも呼ばれるアイゼンクの考えを重視し，性格の脳・神経生理学的基礎を詳しく取り上げ，環境要因として条件づけに触れています。因子分析などデータ解析技法の得意な中谷先生，脳波測定技法に習熟していた河内先生，それにネズミでの条件づけ実験をしていた私，の

3人を採用したのは、この構想にしたがったのでは、と推察できます。しかし、4年後には中谷先生が京大文学部へ転出されて、その後任として感覚心理学と心理学史（とくにヴェント）が専門の高橋先生（'72～'97）が、7年後には河内先生が東大教養学部へ転出されて、その後には河内先生同様生理心理学専攻で脳波技法にも長けた東條先生（'75～'01没）が、それぞれ入職されました。東條先生は、河内先生が中谷先生から引き継いでいた心理学統計をも担当されたはずです。

その後、重松先生を代表とした「脳波にみられる個人差の研究」の文部省科学研究費助成金交付を申請したところ認可され、それが3年間受けられることになりました。研究は、各個人の脳波の特徴とモーズレイ性格検査の傾向とを対応づけるものでしたが、重松先生は途中フランスでの海外研修に行かれたので、実際には、脳波実験と検査とその処理はすべて東條先生が担当されました。報告書の内容は、確か人文論集に発表されたはずですが、私は名みのみのメンバーだったせい、資料を散逸して確認できません。でも、これで、重松先生の構想はその極く一部ではありますが実現されたようにおもいます。この間、実習助手の野口さんは3年後には辞められ、大井（旧姓上野）さんが1年間だけ継ぎ、その後には伊藤（旧姓小林）さん（'73～'07）が入職されました。

心理学の諸領域を専任教員のみでカバーすることはとても無理でしたので、外部の先生方にご出講をお願いしましたが、先ず経済学部の椛山喜代子先生（'54～'02）に隔年で相談心理学と児童心理学を担当していただきました。コース内でも、重松先生は性格心理学と臨床心理学を隔年で、中谷先生は心理学統計と教職課程の教育心理学・青年心理学を、私は学習心理学と発達心理学を隔年で、担当していました。河内先生は生理心理学と知覚心理学を隔年で担当され、あるときは学習心理学を私からお願いしたりしたこともありました。社会心理学が手薄でしたので、初めは東洋大の故・大川信明先生に、その後、ご自宅がお近くであることもあって東大の故・末永俊郎先生に何度かご出講いただきました。またある時期には、経営学部の中野繁喜先生（'67～'94, '00没）の社会心理学的な講義ないし購読（ゼミ）の受講が可能になっていたこともありました。

なお、精神医学（病理学）については、専門の精神医学者（初代は平井富雄先生、2代目は阿住一雄先生）が長くご出講して下さいました。また、障害児関係の講義については、初めは故・杉田裕先生（当時のご勤務先不詳）に、ある時期からは小川再治先生（当時、東京学芸大）にご出講いただきました。これら外部の先生方への交渉・依頼は、ほとんどすべてを重松先生がなされました。この頃は、もちろん教員間の話し合いはありましたが、いわゆる会議と名のつくものは一度もなかったようにおもいます。

初期の頃の講読ゼミは、私個人としてはまったくの手探り状態でした。ゼミの講読本としてペーパーバックの英文洋書（たとえばウォルピの「行動療法の実践」）を取り上げたときには、学生たちから‘まるで英語の授業みたいだ’と不評でしたので、それではと、翻訳版（たとえばエリクソンの岩瀬庸理訳「主体性」）を読んだときには、‘小難しい’といわれました。そして、河合隼雄著「ユング心理学入門」でやっと好評を得たりしました。その後もこうしたことの繰り返しだった感じです。

特殊実験・卒論指導（心理学研究法Ⅰ・Ⅱ）も同じで、学生たちの広範で自由な発想をなんとか心理学的手法を用いて研究できるように方向づけて、実証的な卒論作成の段階まで指導するのに、毎年、四苦八苦でした。アンケート状の質問紙を作製して一般教育受講の学生に応答してもらい、その結果とたとえば向性その他の心理検査との対応関係を調べるなど、さまざまでした。某保育園で園児に一对一の知能検査の研修をすとか、自閉症児の生活療法を行なっている幼稚園（武蔵野東学園）でその補助をすとか、の実習をして、それらに関する文献を調べて、卒論にまとめる、ということもありました。卒論は、最後に教員2名が組になっての面接があり、私は重松先生と組になることが多かったです

が、私担当の学生の評点が80点を超えることは少なく、その都度、力不足を痛感させられていました。

ほとんど全員の学生が就職をする中、各教員の指導・影響下で、他の大学の大学院へ進む卒業生も出てきました。卒業年次順不同で挙げますと、藤岡先生が中京大大学院へ、船越智行氏（現目白大）、水野健治氏（没）、松崎英士氏（現東京女子医大）、遠藤健治氏（現青山学院大）、の各氏が青山学院大大学院へ進学しました。経済学部に入職された後、東海大に転出した宮森先生（'94～'05）は、障害者施設で実務に当たられながら青山学院大大学院博士課程に進んでいます。異色としては、1期生の福留孝至氏がなんと定年退職後に茨城キリスト教大学大学院へ進まれた例があります。なお1期生には、専大事務局に入職して長く図書部におられた小島繁行氏（'70～現特別嘱託）や、初め教材会社に勤務した後、広島に帰られ、写真家になった田原一久氏がいます。その後も、他大学の大学院に進む卒業生が続いていました。

東條先生の入職と同年に、森武夫先生（'75～'00）が法学部に入職され、これ以後、私は二部の一般教育・心理学から離れることになりました。そして暫くして、山上先生（'79～）が入職され、発達心理学を担当されることになりましたので、また私の負担は少し軽減しました。山上先生は、専攻領域だけでなく、コンピュータにも通じておられて、その導入に力を尽くされました。そして、それまでの実験室・研究室はスペースが一教室分（現Dブロック）しかありませんでしたが、もう一教室分改築拡張されて、コンピュータ室を含む実験室が増えました。その後、コンピュータ室としてもう一教室分（現コンピュータ室1）が増えましたが、おそらくこれも山上先生のご努力の成果であったとおもいます。それに、実習助手の伊藤さんが、東條先生と山上先生の教導もあったでしょうが、よく自修もされて、早くにコンピュータの操作技能を習得されました。

この頃、研究法は、学年初めに各教員が自分の指導可能範囲を提示し、学生がそこからどの教員に就くかを選ぶ形式になりました。私は、主に自己意識に関する質問紙などでの調査法を提示しました。質問紙は、学生の要望も汲みながら、私が予め教育心理学研究などの専門誌で調べて作製したもので、学生はそのうちから1・2を選ぶ場合が多かったです。それらを、一般教育の受講生に出席票代わり（学籍番号のみ記入）に配布して応答してもらい、それを資料に、数理的処理をして相関係数算出などをする、という方式でした。質問紙の配布、データの入力作業の指導、その後の数理的処理の指導、の各段階について、私は伊藤さんに大幅に依存しておりました。これによって、卒論の論文的体裁は整ってきましたが、学生の自主性は薄らいでしまった感じがしていました。これら卒論の調査的研究の一部は、梶山先生が室長をされていた学生相談室の報告書に、伊藤さんとの連名で何度か発表させてもらいました。なお、学生相談室には、コース卒業者の金子玲子さん（'83～）がカウンセラーとして早くから勤務されていますし、藤岡先生が室長になられた時期もあります。

商学部に入職された藤岡先生が、暫くして、経営学部に入職された山下先生（'91～）が入職され、そして、宮森先生が経済学部に入職されて、全学部一般教育・心理学の担当者があるかたちになりました。森先生と藤岡先生には、コースの特講あるいは講義・研究法にご出講をお願いしましたが、山下先生のご出講がなかったことは残念です。この間、コースでは、高橋先生がご病気がちだったことと関連して、認知心理学の科目が立てられ、それを私が担当したりしました。そして、社会心理学については、東京女子大（現東洋大）の安藤清志先生にご出講いただいていたのですが、岡先生（'88～'94）が、待望の社会心理学担当の専任教員として入職されました。また、重松先生がご定年で辞められた後には、臨床実務経験のある岡村先生（'90～'97）が入職されましたし、臨床系の実習助手が増員されて志村さん（'92～'98）が入職されています。

またこの頃、一般教育の教科書についての依頼があり、金城編で、東條先生、山上先生、藤岡先生、

岡先生，にそれぞれの専門領域の担当執筆をお願いして，「図説現代心理学入門」（'90，培風館）の初版が出版されました。2版では宮森先生が各章の要約を付けられました。近年（'06），山上先生・藤岡先生編になるこの改訂版が出版されましたが，それには，東大大学院人文社会系研究科に転出された岡先生の後任である下斗米先生（'95～），ご定年を待たずに早めに退職された高橋先生の後任である中沢先生（'99～），私の後任である廣中先生（'01～'04）も執筆されています。

臨床心理士認定に関わり，大学院修士課程修了が受験の必須条件となることを知って，コースでは，大学院設置が急務である旨の上申書を提出していましたが，歴史学コースの故・土井正興先生が早くから大学院設置運動をされていたことと併せて，当時の望月清司学長はじめ大学側が理解を示され，平成4（'92）年に，それまでは国文学・英文学・哲学の3専攻のみにしかなかったものが，歴史学・地理学・社会学・心理学の各コースに専攻の大学院が一挙に，先ず修士課程，2年後には博士課程，の順で発足しました。

そして，臨床心理学系の教育・指導の要として，岡部祥平先生（'92～'01）が入職され，また，博士課程教育経験豊かな中谷先生が再入職されました。さらに，岡部先生のご尽力で，森先生・藤岡先生・宮森先生・岡村先生という陣容の背景もあって，日本臨床心理士資格認定協会の一種指定大学院の認可が下りました。設備的にも，4号館4階のほとんどの教室が改築されて，プレイルームと観察室，小さな心理教育相談室，大学院生控室，を含むいくつかの実験室，それに教員研究室・ゼミ室が設けられました。なお，後に，心理教育相談室は，来談者の便が考慮されて，6号館1階の一廊に別室が設置されました（'99）。こうした流れの中で，コースは，他コースに先立って，人文学科から独立して心理学科に昇格し，東條先生が初代の学科長になりました。この前後に，文教大に転出された岡村先生の後任として，乾先生（'97～）が入職され，また，ご結婚で辞められた志村さんの後任として，波田野さんが入職されています。

コース最後の頃の卒業生の寄せ書き集に，‘伸び伸びと，でも，辛抱強く韌かに’と書いた覚えがありますが，アナクロですが，今の学生さんたちにも同じ言葉を贈りたいとおもいます。

先生方には，研究・実践にご精進なされますとともに，相互にご交流を深められながら，心理学科・人間科学部の今後の充実・発展を計って下さいますよう，お願いを致します。